

千葉の山 御殿山く大日山・鳥場山（からすばやま）

登った山が全部見え、ワクワクドキドキ

福D

毎年冬場になると、千葉の山に取り組んでいるが、千葉は交通不便でやはり、車が便利。今回K原塚さんと清Zさんが車を出してくださることになった。

そして、地元ガイドがスコップを持ち、山に向かって歩き出したので、びっくりして、声をかける。「イノシシが登山道を荒らしてしまつて、めっちゃめちゃだからこれから、皆さんが歩けるよう登山道を直しに行く。」と歩きだしたので、我々はこれから御殿山から大日山まで縦走するけど、登山道は大丈夫か、聞くと「御殿山から先はイノシシにやられて木道などがひっくりかえつてめちゃくちゃだよ。登山道

一日目は御殿山から大日山縦走コースを計画し、一台の車を大日山登山口に置くため、K原塚車と、清Z車が出発。我々は御殿山登山口の駐車場で、清Z車の二人が帰ってくるのを待っていると、なんと、大型観光バス二台が到着。ぞくぞくとザックを背負った中高年が下りてきた。八十人は、

が荒れてるよ」と教えられ、縦走はあきらめ、急遽計画を変更し、縦走はやめることに。この八十人の団体と一緒に山頂にもつかれない。そこで、大日山を先に登ろうということで、携帯で二人に戻るよう伝え、また車に乗り込み、大日山登山口に向かう。大日山ピストン、車で戻り、御殿山ピストンということになった。

大日山はよく整備された登山道。展望のない暗い山道だったが、山頂は大きな桜の木があり、太平洋から東京湾まで見渡せる、とても気持ちのよいところだった。大日如来が祀られていた。地元の信仰の山だったのでしよう。ホッとするような癒しの山頂だった。

今まではイノシシ被害がまったくなかった。我々が休ん

でいると、御殿山まで行ってきたという二人がいたので、急に、ムラムラやる気がでてきてしまった我々。イノシシ被害も少なそうなので、出発。結局御殿山まで、縦走することになった。

海軍の飛行機墜落の慰霊碑、（昭和一六年の出来事）、宝篋山（ほうきようさん）、鷹取山まで来て、ツアーの登山者に出会った。先ほどの大型バスのツアーとは違う団体だった。御殿山に着いたが、団体様はもういなかった。マテバシイとスタジイの太木がりっぱだ。明るい山頂で、ゆつりくつりいだ。真つ白な富士山、そして新年ハイキングに皆さんと登った富山、高い鼻をつんと立てている伊予ヶ岳が良く見えている。

さて、車は大日山登山口に二台置いてあるのでこれから

どうしようと話し合った。協議して、全員、このまま御殿山登山口に下り、後はタクシーを頼むこととなった。K原塚さんと清Zさんだけタクシ―に乗り込み、車を取りに。我々は山田中バス停でブラブラしながら、待った。

翌日、烏場山に登った。私は二回目。前は花嫁街道から登り始めているが、今回は、花婿街道から登り始めた。全く覚えていないのに、愕然とした。初めて訪れたような新鮮味だった。

烏場山頂から、我々が今まで、登った山が全部見え胸がワクワクドキドキ。今まで、千葉の山へ登っても、山頂から見える山の名前が全然わからず、「千葉の山は特徴がなくつまらない」と思っていたが、そんなことなかった。自分た

ちが登った山が良く見え、理解できた。烏場山は以前に登ったことがあったが、ほとんど、記憶になかったのが悔しい。

この二日間、車をだしてくださったK原塚さん、清Zさん、首都高の迷路のような運転。そして、クルクルと忙しく車を回してくださり、我々は、ただ、待っているだけで、全く、申し訳ない。このお二人にはただただ、頭が下がります。お疲れ様でした。ありがとうございました。



烏場山・山頂にて (撮影・小栗弘子)

南房総の鳥場山からすばやま（二六七頁）

花婿ルートから花嫁を迎えに

世K

二月八日（南房総の山旅の二日目）、民宿南荘を出発して国道128号線を東に進む。両脇は花畑、和田浦駅を過ぎ、北側の細い道に入る。ますます花の競演。ストック、キンセンカ、ポピー……。昨夜の宴席で、私の八〇歳を祝って花束をいただいた。立派な花束だ。いくら生産地と言っても安くはないだろう。まだ八〇歳にはちよつと遠いのだが、幹事の福田美子さんがそんな情報を民宿の女主に伝えたのだろう。民宿が奮発してくれたのだそう。嬉しい。車を廃屋になっている温泉

の駐車場に入れて登り始める。鳥場山は二度目になる。前回来たのは美子さんがガイドブックにメモした記録によると六年前らしい。そのときは今登り始めるこの場所に降りてきた記憶ははっきりしている。しかしそのとき一緒だったメンバーはコースの記憶がない。前回は長者川の西の尾根を登って鳥場山に登り（花嫁海道）、東の尾根（花婿コース）を降りて来たのだが、今日はその反対を歩こうということだ。ここで花嫁海道の由来をちよつと。昔は海の集落も、山

の集落も隣の集落に行くのは容易ではなかった。従って結婚の相手も同じ集落同士ということになる。しかしそれが続くと血が濃くなり、身体に障害を持つ子供が生まれるようになる。それを防ぐために他地域から結婚の相手を選ぶようにする。海側の婿は山に向こうから嫁をもらうようにし、その嫁は山を越えて海側の婿と結婚する。そのとき花嫁が通ったのが花嫁街道だ。花嫁がどんな衣装、履物でここを通ったのか、さぞ大変なことだっただろう。

「花婿コース」というのは後からつけた名前だと思う。登り口辺りは早咲きの桜が満開で、ピンクの花にメジロが集まっている。やがて展望台に出る。海が眺められる。波は静かだ。道が下りに向かうようになり、不安になり地図を眺めて鳩首協議。前回のルート経験者にこの道の記憶が全然ない。降り切ったところが「はなその広場」で、その先が花婿コース入口となっており、一安心。長者川の中にコンクリートブロックが置かれていてこれを伝って川を遡る。ここでS々木M枝さんが「ここ通ったこと思い出した」と声を発する。黒滝に出る。落差が一五メートルある。冬場で水量が少ないが夏に見たらさぞ豪快だろう。その脇に木造の展望台とそこから山につながる木の階段がつながっている。この特異な構造物を見てルート経験者がみんな思いだしたようだ。その木の階段は滝を高巻きするような構造になっている、延々と続く。そこを通過すると単純な尾根歩きであるが、低い山にし

ではアップ、ダウンの連続で結構きつい。ちょうど昼ごろ鳥場山（二六六・六辺）に着く。小さい花嫁姿の胸像がちょこんと置いてある。西北西方向に富士山が眺められる。北西には千葉県最高峰愛宕山のレーダードームが、その右手には去年登った三郡山、高山も確認できた。

帰途の花嫁街道を下る。やっぱり花嫁街道だけあって花婿ルートに比べるとアップ、

ダウンが小さい。この山道は花嫁だけでなく日常の生活物資の往来に使われていたとあって、駒返し、馬井戸とか経文石など昔の地名が残っている。経文石のところでは〇栗つとむさんが昔道に降りて大石を見つけ経文を確認しようとしたが、文字は風化してしまった。その道の専門家の〇栗さん

でも確認できなかった。

やがてマテバシイの見事な純林に到着。登山道の南西斜面に一面に生えている。庭木で見るのはせいぜい五畝もないだろうが、ここのは一五畝はあるうか。自宅に帰って樹木図鑑（二種）を調べたら、分布はいずれの図鑑も「本（紀伊半島）、四、九、沖」となっている。気候温暖な地方の樹木だ。房総半島に生えているというのはまったく珍しいことだろう。

ここでの会話。「小さいときシイの実を食べた。」「食べた、食べた。小さい実だった。」「炒って食べた。」「生で食べた。」「マテバシイも実がなるんでしょう。食べられるのかしら？」

帰ってから調べました。「私たちが『シイ』と呼んでいる

のは正しくは『スダジイ』のことで、この木はきょう歩いたところにいっぱい生えていました。』ということ。そして「マテバシイ」の実も食べられるそうです。

やがて急降下して花嫁街道入口（出口）に降りてきました。



【アドバイス】一般に里山を歩くには二五〇〇〇分の一つの地形図では難しいところがしばしばあります。とくに千葉の山はそうです。今回、現地の「和田浦歩こう会」が作成した【花嫁街道ハイキングコースマップ】が大変役に立ちました。JR和田浦駅か駅の近くの花の広場公園「花夢花夢」地場産品直売所で手に入ります。

【メンバー】 福D美（L）、世K佳（SL）、K原塚（SL）、〇栗弘、同つとむ、福D利、W部、清Z、S々木M、K端